

## 青森県立高等学校将来構想検討会議第1分科会（第4回）概要

日時：平成26年11月10日（月）

13:00～15:40

場所： ウェディングプラザアラスカ サファイア

### <出席者>

#### 第1分科会委員

丹羽 浩正 分科会長、瀧原 祥夫 分科会副会長、佐井 憲男 委員、  
斎藤 靖彦 委員、相馬 俊二 委員、高橋 公也 委員、高橋 福太郎 委員、  
千代谷 均 委員、斗沢 一雄 委員  
川口 敏彦 専門委員、黒滝 敏文 専門委員、佐藤 晋也 専門委員、  
豊島 隆幸 専門委員、花田 慎 専門委員、福井 武久 専門委員、  
山口 龍城 専門委員

### 1 開会

佐藤理事から、挨拶があった。

### 2 調査検討

学校・学科の在り方について（各学科等の現状と今後の方向性の整理案について）

#### （1）学校・学科の在り方に関する基本的な考え方

事務局から資料1、資料1附属資料、資料2の全体構成及び「1 学校・学科の在り方に関する基本的な考え方」について説明した。

#### （2）普通科等の基本的な方向性

事務局から資料2「2 全日制課程（1）普通科等の基本的な方向性」について説明した。

分科会長から、様々な進路を目指す生徒が在籍する普通科の方向性として、各学校の特色化を図ること、そのために単位制などの取組を進めること、生徒が他校の生徒とも連携した活動を行い、刺激を受け合う機会を作ることなどとしてまとめられた事務局整理案について意見を求めた。

委員から、次のような意見があった。

- 各学校の特色を重点化するという点に関連して、青森高校、弘前高校、八戸高校については、特別に「最高の教育」を施し、「最高の知性」を生徒が身に付けられるような取組をしてはどうか。同時に、一方で特別な役割、使命があることを教える必要もあるのではないかと。この3校の生徒には世のため人のために役立つ人材として自覚していただきたい。

特別扱いということになると、批判を受ける考え方かもしれないが、青森県や

さらには日本をリードする人材の育成を図るためには、普通高校の在り方の一つとして、考えても良いのではないか。

- 他校の生徒とのつながりという点に関して、例えば弘前高校、青森高校、八戸高校3校のトライアングルというのは、言葉としては非常に良いと思うが、実際にどういう連携をするのかのイメージができない。その仕組みがイメージできるように議論を深めていく必要があるのだろう。
- ある普通高校に以前は普通科と商業科が併設されていたが、学級数の減少により、商業科がなくなり、普通科の商業コースとして設置されている。1学年の時には全員共通の科目を履修し、2年になって進路が進学か就職かでコースが分かれ、就職を目指す場合は商業コースを選択する。2年生からの商業コースなので、取れる単位数も限定され、資格取得の面から見ても、中途半端な感じがする。他のいろいろなコースを設けるにしても、中途半端になってしまう可能性もあると思う。

分科会長から、普通科系の各専門学科は、10年から20年程前に生徒の多様化に合わせ設置されたが、時間の経過により、学校教育全体として理数教育や英語教育がより重視されるなど、学科を取り巻く環境の変化と共に役割が変わり、また、生徒のニーズと学科の目指す在り方とのギャップも生じていることについて指摘があった。普通科系の専門学科の方向性としてまとめられた事務局整理案について意見を求めた。

- 理数科の方向性の中で、「普通科のコースの設置など」というところがわかりにくい。理数科であることによって、生徒たちが様々な演習などを行っているが、コースになったとき、どの生徒にどれをやらせるのか混乱する。この表現は、普通科のことを指しているのか、その点を確認したい。
- (事務局) この分科会での理数科の在り方に関する御意見として、コース制にしてそれぞれの学校の特色を出すことも考えられるといった御意見もあったことから、理数科として置く場合もあれば、普通科の中で特に理数系に力を入れたコースとしてやっていくやり方もあるのではないかとこの視点で記述している。
- 理数科の取組は、生徒に学力向上以上の良い影響があると考えている。特に課題研究については、準備段階から段取りを組む必要があることや、高校だけでなく、大学の力を借りながら取り組む必要があることから、教員は大変苦勞しており、それが生徒たちにも伝わることから、キャリア教育の一つとして、効果を上げているのではないか。
- 「普通科の一つのコースとすることも検討する必要がある」とまとめられていることについては、そのような方向に持っていくのが良いか、あるいは単独の理数科という形で持っていくのが良いかということであるが、難関大学への進学という視点だけではなくて、多角的な視点を養うということも、特徴ある学科だからこそできることだと思っている。

これからの青森を支える人財、青森を牽引するような人財を育成していくという御意見もあったと思うが、科学的な分野における探究心や好奇心などを育成していく上で、普通科のコース制にしてしまうと、そういう利点が薄れていくような気がする。

スティーブ・ジョブズの卒業式での言葉の一つに「ハングリーであれ、愚か者であれ」というものがある。私なりに解釈するところでは、探究心を持って、今までの既成概念にうずもれることなく、冒険心を持ちながら、取り組んでみたらどうかというエールだと思っている。そのようなところも踏まえると、ある程度は特徴ある学科の設定があっても良いと思っている。

- 理数科に記載しているメディカルコースなどのコース設定については、むしろ普通科の方に持っていくべきではないのか。理系の中でそういったメディカルを目指す生徒たちのために、こんなコース設定もあればいいのではないかと思う。

また、3校の連携については、様々な形で、先生方の研修、生徒の勉強方法などにおいて既になされている。もちろん3校ばかりではなく、様々な学校において連携は既に重ねられている。

### (3) 職業教育を主とする学科の基本的な方向性

事務局から資料2「(2) 職業教育を主とする学科の基本的な方向性」について説明した。

分科会長から、これまでの会議において、農業、工業、商業、水産の各学科について、地域産業を担う人材育成を果たしてきており、社会が変化していく中において、基礎的・基本的な知識・技能を身につけることが大事であること、また、産業界をリードする人材を各専門高校で育成するためには、大学進学等の指導も必要との意見があったことを確認した。各学科の方向性としてまとめられた事務局整理案について意見を求めた。

委員から、次のような意見があった。

- 農業は今までずっと守られてきた状態であったが、突然TPPの問題や、海外と競争する状況に直面し、農家は不安が一杯で、これから農業を続けられるのかと思っているのが大多数だと思う。その中で、農業高校の生徒にどういう明るい未来を持ってもらうかということが非常に重要だと思う。整理案にあるように、大学の最先端の農業を実際に体験してもらうとか、農業で立派に経営を成り立たせて、面白くやっている農業経営者などと強く連携するなどにより、まずは生徒に希望を持たせて、将来像を持ってもらうことを重点的に取り組み、それから基本的な知識等を身に付けていくように進めればいいのではないかと思う。
- いろいろな資格取得への取組は引き続き必要ではないかと思う。また、農業も水産も、いろいろな技術が発達していることから、高校だけでは簡単に技術を身に付けることができないので、必要に応じて、県営農大学校や大学など専門的な学校へ進学し、技術を磨いて、就業することが大事ではないかと思う。加えて、

職業に興味を持つような教育をしてほしい。その体験が基礎的なところにあるのではないかと思う。

- 工業高校の在り方として、「工業科と理数科に力を入れている普通科等を併設する高等学校の設置」という記述についてだが、基本的に、工業、農業、商業という専門学科は、高校を卒業した後、学科と関連する職業に就くことがほとんどの生徒たちの目標で、そういう意識を持って高校生活を送っていると思う。それに対して理数科、英語科を含めた普通高校は、大学等上級学校への進学という次のステップがあって、それから自分たちで進路を決めるなど、高校の時点では進路はまだはっきり決まっておらず、進学するということが決まっていると思う。

工業高校の中でも、リーダー、研究者、技術者を育成するためには、数学や英語の力が必要で、そういう意味では理数科や英語科等との協力も必要なのではないかという発言から、普通科等を併設という方向性の記述になったと思うが、進路が決まっていない生徒と、進路を決めた生徒を、同一の学校で指導していくことは、無理があるのではないかと思う。普通科等を併設という言葉が方向性の中に入れると、差し障りが出てくるのではないかと思う。

工業高校から大学へ進学した場合には、数学や英語の力が必要だと思うので、理解力を上げる指導法を工業高校の中で何とかできないものかと考えている。

- 6次産業化は農業系ではない要素が加わるから6次産業化なのではないかと思う。そういう枠を外して考えることも必要ではないか。
- 商業科では、「商業高校の在り方の検討」の中で、商業科目の分野としてマーケティング、ビジネス経済、会計、ビジネス情報とあるが、経営という言葉が出てこない。経済も必要だが、商業は経営なので、経営という観点を取り入れた方がいいのではないか。

分科会長から、家庭科は生活産業と関連し、特に「食」については健康分野と合わせて、県の成長産業として位置付けられていること、また、看護科は県内の看護職の育成に大変大きな尽力をされていることについて指摘があった。各学科の方向性としてまとめられた事務局整理案について意見を求めた。

- 総合学科の中では多様性への対応ということで、例えば家庭科分野、生活関連分野に興味のある生徒が、食や被服、保育などを学び、さらに深めたい者は大学に進学し、そうでない者は関連する産業に就職している。総合学科において学習を深めるということでは、どうしても制約がある。

家庭科で食分野の話があったが、百石高校の食物調理科は、厚生労働省認可の調理師養成施設でもあり、そこで求められているのは、高校3年間で、調理師の免許を取るということに尽きる。従って、最優先は、調理師免許を取得するための知識と技能をみっちり勉強させること。そういう意味では家庭科の中でも、百石高校の食物調理科は特異な存在だと思う。

それと比べて、他の家政学科には、多様性がある。その中で課題研究などを通して力を身に付けていると理解している。

- 高等学校から看護系の大学へ進む生徒は多い。大学に行くと高校3年と大学4年、合計7年かかる。県内では黒石高校看護科があって、5年一貫教育で養成している。地元では就職もかなり良いと聞いているので、むしろもっと増やしてもいいくらいではないかと思っている。

- 調理科について、県立は百石高校だけだが、私立は3校、青森山田高校、千葉学園高校、東奥学園高校で年間120名の調理師を養成している。

調理科と看護科、福祉科は、厚労省との関わりが非常に強くて、定員より1人多くても法令違反だといって指導を受ける。県立高校の場合には、40人合格すれば、40人が入学するが、私立の場合は、160人希望者がいても入学時点で何人入学するのか見当がつかない。そういう中で入学者数が42人となると、厚労省からお叱りを受けたりする。

調理科も看護科も総じて進学も就職も非常に良く、生徒の質も大変良い。

- 看護科については、正看護師と准看護師の養成があり、地域のニーズ、生徒のニーズを合わせて、今後どれぐらいの人数が必要となるのかという将来的なことも考える必要がある。

#### (4) 総合学科の基本的な方向性

事務局から資料2「(3) 総合学科の基本的な方向性」について説明した。

分科会長から、総合学科は、これまでの会議において、自己の進路への自覚を深め、主体的な学習に取り組む学科であるが、その特色化や中学生に対するPRの必要性と、多様な選択科目の設定には一定規模が必要であるとの意見があったことを確認した。総合学科の方向性としてまとめられた事務局整理案について意見を求めた。

委員から、次のような意見があった。

- 総合学科は1年次に基礎的な科目を学習し、2年次に本人の興味・関心に応じて各系列に分かれて、専門的な学習をする。学校の実情に応じて人文科学、自然科学、家庭、商業、情報などの系列に分かれる。一般的な傾向としては技術系(商業、情報、家庭等)は、座学系より選択する人数は少ない状況となっている。それは良さでもあり課題でもあって、良さとしては少人数でじっくり勉強できること、課題としてはその分教員の負担が増すということになる。

- 総合学科については普通科、専門学科に並ぶ第3の学科として生まれて久しいが、本県ではそれほど増えていない。中学生からするとすごく魅力のある学科だと思うので、今後も理解を深めながら、進めていってほしい。

ただ進めるだけではなくて、整理案にあるとおり予算が必要となるので、県の方も御配慮いただきたい。

## (5) 定時制課程・通信制課程

事務局から資料2「3 定時制課程」「4 通信制課程」について説明した。

分科会長から、定時制課程及び通信制課程については、これまでの会議において、多様な事情を持つ生徒に対して高等学校教育を受ける機会を確保するという観点から、重要な役割を果たしているとの意見があったことを確認した。定時制課程・通信制課程の方向性としてまとめられた事務局整理案について意見を求めた。

委員から、次のような意見があった。

- 工業科の定時制の入学者が減少していることについて、確かに八戸工業高校、青森工業高校は、入学者数が1桁になっている。弘前工業高校の場合には、弘前中央高校と黒石高校の定時制課程が募集停止となったこともあり、人数が増え、4学年併せて60数名が定時制に在籍している。工業科は定時制であっても工業技術を身に付けることが目的だが、最近では、人数もさることながら、多様な生徒が在籍していて、機械を操作させられない子ども、多動症やいろいろな面で落ち着きがない生徒などが目立ってきた。これからの工業高校における定時制の在り方は、一度考える必要があると思う。
- 定時制・全日制ともに同じ機械、器具等を使用する。必要であれば工業科の定時制課程を継続することも可能だとは思いますが、危険が伴う作業等があることから、充分考慮して指導に当たらなければいけない。このための負担は非常に大きくなるので、このことも併せて検討していく必要がある。
- 「その他の方向性」として記載されている「コース制（商業、進学等）の導入」の「等」について、資料1の意見の中に商業科目やスポーツ、芸術、進学、特別支援などのコース制を導入という意見があるが、資料2の方向性の「等」に特別支援のコースが入っていないことを確認したい。できれば、スポーツコースなども入れていただきたい。
- 通信制課程の後期入学に関しては、なるべく早い時期に実施していただきたい。
- 定時制課程の3部制高校や、定通併修等を希望する生徒が増えてきているというのをもう少し真剣になって考えていかなければいけないのではないかと思う。

## (6) 学科構成等

事務局から資料2「5 学科構成等」について説明した。

分科会長から、学科構成を考えることは、未来の青森県の各分野を担う人材育成を考えることであり、各地区の産業構造や生徒減少の状況を踏まえ、1つにはこれまで地域で学ぶことのできた学科は、選択肢として残すこと、もう1つには地区を越えて拠点校に集約するという2つの方向性が考えられること、加えて、地域の選択肢として残す場合には、例えば規模が半分になっても単独校として配置する、あるいは、複数学科の併設により規模を維持することが考えられ、このバランスがポイントになることが指摘された。このことについて意見を求めた。

委員から、次のような意見があった。

- 県外のある総合学科の高校は、地域の普通高校1校と専門高校2校の合わせて3校を、少子化により1つの総合学科の高校に統合して4年経った。それぞれの良さを活かして、1つの総合的な学校を作ろうというコンセプトの下で取り組んだが、結局、相当苦勞した。そこにたくさんの資源はあるけれども、どういう手順で、どういう生徒を育てるかという準備があまり良くなく、結果的に生徒が選んでくれなかった。その学校は3つの資源を活かしながら、もう1回ゼロから学校づくりをしようと、今取り組んでいるという話を聞いた。

そういう意味では、いろいろな多様性を残して、複数の学校を統合するというのは一見多くの選択肢はありそうだが、綿密にその学校の在り方というものを考えていかなければ、苦勞するだろうということを、強く認識した。
- 異なる学科を併設する統合を行うと、ある意味では特徴が消されていくというような部分もあるかと思う。また、農業高校では農地の維持、工業高校では実習施設の維持が可能なのか、水産高校では取得すべき資格を引き続き取れるのかという検討も必要だと思う。将来的な人口減少を考えた時に、やむを得ない面もあると思うが、相当覚悟して検討しないと、かなり難しい部分があるだろうということ、今回の議論を通して重々考えている。
- 高校の16歳から18歳というのは、多感な時期であって、人間形成、人格形成の上で最も重要な時期だと考える。そういう視点から何をすべきか。学科の議論とは関係ないのかもしれないが、この時期に、世界観、歴史観、人間観、あるいは死生観、こういうものに興味を持つことがなければ、多分一生そういうことを考えないまま人生を過ごしてしまうのではないかという気もする。高校生としては人生の先輩である教師から、その時期に是非教えていただきたいことではないかと考える。
- 弘前実業高校は、商業、農業、家庭、スポーツと色々な専門学科が一緒になった学校として、学科の枠を超えた交流でお互い刺激となっていて、大変うまく学校経営ができているという意見もある。そういった意見を参考にできないものか。
- 「学科構成の方向性」として「地域を支える人財の育成」という点だが、商業高校の場合は、半数の生徒が就職し、そのうちのほとんどは、県内就職を希望している。県外を希望する生徒は非常に少ない。青森県の将来的な人口減を考えた場合、専門高校をもう少し大事にしていかなければならないのではないかと考える。地域を支えている人財は、専門高校の生徒ではないかと思う。
- 複数学科を併設した高校は、東北でもいろいろな県で設置されている。例えば山形県では村山産業高校や、酒田光陵高校など、商業、工業、農業を一緒にした高校が設置されているが、果たしてその高校がうまくいっているのかどうかを、一度何らかの形で話を聞く機会があってもいいのではないかと考える。
- 総合選択制については、複数の学科が併設され、それぞれの生徒の興味関心に応じて、異なる学科の単位を取得することができるという形になった場合、その分、専門とする学科の授業時数が減ることから、深く専門を学んでほしいという

本来の専門高校の立場として、本当にそれでいいのだろうかという気持ちも少しはある。そういう意味で、複数学科を統合したような高校は、慎重に検討していくべきではないかと思う。

- 専門高校同士の連携は、今後絶対必要であると思う。例えば農業の場合、6次産業化という視点から、農業経営者としては必ず簿記やマーケティングの勉強は必要になるだろう。あるいは商業の面から見ても、地元に残って就職する生徒にとって、例えばこの商品がどのようにして生産され、ここにあるのか、つまり生産者の立場に立って、そういった知識を持ちながらビジネス経済に関わっていくという意味においても、専門高校との連携は必要だと考える。ただし、同じ高校になるということに関しては、少し慎重な考えを持っている。
- 普通高校では専門学校などに進学する生徒もいるし、就職をする生徒もいる。普通科のいわゆる小規模校において、取得する資格は商業系の資格が多いと感じている。その資格取得のために先生がきちんと配置されているのかどうかという疑問を持った。各学校の校長の要望を聞いて、それに必要な専門的な先生を配置するような工夫も必要なのではないかと思う。それが生徒たちの自信に繋がっていくのではないかと考える。単に併設する、コースを設置するというだけではなく、専門の先生を配置し、きちんとした指導をして、あの学校に行けば、こういう資格を取れるというような高等学校を目指していただきたい。
- 「地域を支える人財の育成」について、今、私たちがやらなければならないことは、オープンイノベーションという考え方ではないかと思う。生徒たちをどういう形で地域の中に参画させていくかということから入っていかないと、地域を支える人財はなかなか育成できないと考えるので、高校生が地域参画する機会を学校の中で作っていくことが、大事だと思う。実際に、生徒たちは地域に出ていくことによって、コミュニケーションがうまく取れるようになり、地域を理解することがかなり深まっている。このような教育実践から、高大の連携もできているし、新しい技術という面では、想像もつかないような大企業との連携ができている。

このことの成果として、教育、農業、町おこし、そしてビジネス構築という4つの課題解決に向けた新しい取組が確実に形になっている。

- 学科構成の考え方としては、拠点校という考え方に立って、それに必要な学科、特に農業高校においては、生産学科はもちろん、関連学科についても適切に設置し、トータルで教育課程を編成し、1年2年で地域参画に必要な資格取得ができるようにすることは可能であると考えます。
- 1次産業である農業を中心にした産業複合体を作り、ビジネスを構築し、事業法人と学校との間でデュアルシステムを作り出すことで、就労と就農、地域の担い手育成という課題に応えることができると考えている。
- 七戸高校に健康福祉の系列がある。介護福祉士の国家試験資格を得る制度は、近年改正され、現在、七戸高校は特例校となっているが、25年度入学生からその特例がなくなり、受験資格が付与されないこととなっている。現在、厚生労働



省において介護福祉人材の養成について会議が設置されており、その場において、介護福祉士の国家試験受験資格を得る制度の特例の再開に向けて検討している。

青森県は少子化が非常に進んでいるが、合わせて高齢化も非常に進んでいる。その高齢化を支えるのは、医師、看護師、そして介護福祉士だと思う。介護福祉士については全国で、10年間で100万人を必要としている。もちろん明の星短大や、東奥保育・福祉専門学院での養成はしているが、東奥学園高校の80人と、七戸高校の10人位では、とても足りない。学科として、考えてみてもいいのではないかと思う。

## (7) 縦の連携・横の連携

事務局から資料2「6 縦の連携・横の連携」について説明した。

分科会長から、これまでの会議で、併設型中高一貫教育については、既に導入している三本木高校の状況から、他の地区にも導入した方がいいのではないかという意見と、一方で地区の中学校の影響もあるので、中学生の数などに留意して慎重に検討すべきという意見があったこと、連携型中高一貫教育については、学習指導要領の改訂や、生徒数の減少等により、連携が難しくなっているとの意見があったことを確認した。縦の連携・横の連携についての方向性としてまとめられた事務局整理案について、意見を求めた。

委員から、次のような意見があった。

- 併設型中高一貫教育の方向性について、「SSHをはじめとする」という記述は不要ではないか。文部科学省の指定（5年間）によるものであって、今後継続していけるとも限らないので削除してはどうか。
- 現在、全国の公立の併設型中高一貫教育校は、70～80程度で、1都道府県につき複数校ある県はそれほど多くはないことから、新たな設置については、かなり慎重であるべきではないか。仮に設置するとしても、併設型は、特に大きい市部で、なおかつ小学生の保護者にとって、魅力のある学校でないとうまく行かないので、ある程度の規模のある学校で、あるいは進学をメインにするなど、しっかりとした構想がないと難しいと思う。
- 連携型中高一貫の課題としては、学習指導要領の改訂に伴い、連携の時間が減るということだが、一番は中学校の生徒数が非常に減少しているということが大きい。これを他校で実施するというのも慎重であるべきだと思う。連携型中高一貫も併設型中高一貫も非常に良いことである。先生方は大変苦勞しているが、やればやったなりの効果はあると思う。しかし、肝心の生徒がいないと難しいのではないかと思う。
- 併設型中高一貫教育の「ウ 今後の方向性についての意見」の1つ目は、今まで成果を上げているので「新たな設置について検討する必要がある」という意見。2つ目は、「導入校については慎重に検討する必要がある」という表現になっている。つまり、「今後の方向性についての意見」としては、新たな設置について

検討するという前向きな趣旨になると思うのだが、それに対して「エ 現時点で考えられる併設型中高一貫教育の方向性」では、「新たな設置については慎重に判断する必要がある」ということで、どちらかという後ろ向きな感じのまとめ方になっている。ウとエの矛盾はないのか。

→（事務局）委員の皆様からいただいている御意見では、設置する場合には周囲の中学校等の影響もあるなどにより、導入することも含め、慎重に検討する必要があるという趣旨であると認識していたので、「エ」をこのような表現とした。委員の皆様の御意見をいただきたい。

○「ウ 今後の方向性についての意見」が「導入校について慎重に判断する」ではなく、「導入について慎重に判断する」ということであれば矛盾しないと思うので、そのようにすれば良いのではないのか。

→（事務局）本日の資料は、これまでの意見を「ウ」でまとめ、それを「エ」で整理した形になっているので、「エ」について御意見をいただくということで、御理解いただきたい。

分科会長から、学校間連携、校種間連携、大学との連携、家庭・地域との連携について意見を求めた。

○ 今の高校生の社会年齢、生活態度が低年齢化しているという話を聞いた。おそらくこの原因の多くは家庭にあるのだと思う。当然家庭で教育されるべき基本的なことがなされていないからではないかと思う。一方で、家庭の方では、学校に求めることが多すぎるのではないかとも思う。家庭との連携と同時に、先生方も言うべきことは言うことも必要なのではないかと思う。

#### （８）その他及び第２分科会での検討における留意事項

事務局から資料２「７ その他」「８ 第２分科会での検討における留意事項」について説明した。

分科会長から、全国募集については、県立高校であることから、本県の高校生の教育の充実という視点で、どういった場合に全国から生徒を募集することが適切と考えるか意見を求めた。

委員から、次のような意見があった。

○ 本県の県立高校の場合は、秋田と岩手の北部は隣接協定があって受検できるが、それ以外は、保護者の引っ越しを伴うことなどが必要で、全国から呼べないことになっていると理解している。特別な何かがなければ、できないのではないかと思っている。

○ 現在の青森県の規定では、できないことになっており、改正が必要なので、その点を検討するかどうか、またそういうニーズがあるのかどうかということも含

めて、県で考えてみればいいのではないかと思う。

#### (9) 地区部会への意見照会及び今後の検討スケジュール

事務局から資料3「地区部会への意見照会及び今後の検討スケジュール」について説明した。

委員からの意見、質問はなく、分科会長からこのスケジュールに沿って進めること及び次回第1分科会において地区部会長等から地区部会での意見を報告することが確認された。

### 3 閉会